

2025年スポーツピックアップ

10月 日本、王国ブラジルに初勝利 サッカー



日本-ブラジル。後半、勝ち越しのゴールを決める上田選手（中央）

後半3得点で逆転
10月14日に東京都調布市の味の素スタジアムで行われたサッカーの国際親善試合で日本代表がワールドカップ（W杯）で5度の優勝を誇る「サッカー王国」のブラジル代表を3-2で破った。日本がブラジルに勝つのは初めて。
日本は2点を追う後半、南野拓実選手が相手のミスを突いて得点し、中村敬斗選手が同点ゴール。さらに攻勢を仕掛け、Cから上田綺世選手が決勝点を奪った。森保一監督は初勝利に向けて「同じ目線で戦うことと「全力をぶつけること」を選手に求めた。W杯優勝という大目標へ一歩近づく歴史的な夜となった。

11月 ドジャースがワールドシリーズ連覇 米大リーグ



MVPに選ばれ、笑顔でトロフィーを掲げる山本選手（中央） AFP時事

3勝の山本選手がMVP
米大リーグのワールドシリーズ（WS、7回戦制）は、大谷翔平・山本由伸・佐々木朗希の日本人3選手が所属するロサンゼルス・ドジャースと、カナダ・トロントがホームタウンのブルージェイズとの間で行われ、ナ・リーグ覇者のドジャースがア・リーグを制したブルージェイズに連覇。通算4勝3敗として2年連続9度目の頂点に立った。シリーズで3勝を挙げたドジャースの山本選手が最優秀選手（MVP）に選ばれた。
最終第7戦までもつれたWS。山本選手は第6戦に続き九回途中から2日連続の登板。チームは十一回に勝ち越し、山本選手は無失点で試合を締めくくった。WSで日本人選手がMVPに選ばれるのは2009年当時ニューヨーク・ヤンキースの松井秀喜選手以来。

11月 日本で初めて開催 デフリンピック



ハンドボール・ブラジル-日本。試合前、手話で国歌を「斉唱」する日本の選手たち

来場28万人、手話の拍手で応援
聴覚障害者のための国際スポーツの祭典、「第25回夏季デフリンピック東京大会」が11月に12日間の日程で開催された。日本初開催の今大会は19競技を実施。日本勢はメダル51個（金16、銀12、銅23）を獲得し、過去最多だった前回2022年大会の30個を大幅に超えた。
79の国・地域などから約3000人がエントリー。大会を通じて、各会場には当初の目標を大きく上回る約28万人が来場。手話の拍手で選手を応援した。国際ろう者スポーツ委員会のアダム・コーサ会長は閉会宣言で、「不可能は何もないことを証明してくれて誇りに思う」と総括した。

2025年12月8日発行

5月 横綱大の里、誕生 大相撲



横綱土俵入りで雲竜型を披露する大の里

「唯一無二の横綱を」
5月、大相撲で日本出身としては8年ぶりとなる横綱大の里（24）が誕生した。3月の春場所（24）に挑んだ5月の夏場所でも2場所連続4度目の優勝。日本相撲協会は理事会で横綱昇進を満場一致で決めた。大の里関は「横綱の地位を汚さぬよう稽古に精進し、唯一無二の横綱を目指します」と抱負を語った。
新横綱で迎えた7月の名古屋場所（4）は四つの金星を与えて賜杯争いから脱落。9月の秋場所では初日から圧倒的な馬力を生かして白星を重ね、2場所ぶり5度目の優勝を遂げ、最高位の面目を施した。

9月 国立、連日満席に 世界陸上



世界新記録を樹立し、観客から祝福されるデュブランティス選手（中央）

34年ぶり東京開催
9月に東京・国立競技場で行われた陸上の世界選手権は、連日満席の大盛況。大会9日間の総入場者数は61万人を越え、1991年東京大会（約58万人）、2007年大阪大会（約35万9000人）を上回った。
日本勢は競歩で銅メダル2個、他、入賞9の成績。競歩男子35キロで勝木隼人選手が悲願の表彰台。藤井菜々子選手は競歩女子20キロで五輪を含め日本女子初のメダルを手にした。男子棒高跳びのアルマント・デュブランティス選手（スウェーデン）は6メートル30の世界新記録を樹立し3連覇。他の種目が全て終了した午後11時前、最後の跳躍を成功させ、約5万人が詰め掛けた国立競技場は熱狂に包まれた。

9月 小田選手、「生涯ゴールデンスラム」 車いすテニス



テニスの全米オープンに優勝してトロフィーを掲げる小田選手

全米テニス車いす初Vで
車いすテニスの小田選手（19）は9月に行われた全米オープンテニス車いす部門シングルス決勝で、アルセンチン選手を6-2、3-6、7-6で下し、初優勝した。シングルスで四大大会通算7勝目。四大大会とパリンピックを全て制する「生涯ゴールデンスラム」を最年少で達成した。
最終セット、10点先取のタイブレーク。相手のマッチポイントで4本もしのぎ、偉業にたどり着いた。今後について小田選手は、「この競技を見て、観客やファンを増やしていくのが楽しみ。自分のためにも、このスポーツのためにやりたいことがたくさんある」。まだまだ先へ進んでいく決意をみながら話した。

